へ 5
2846
1

山之手春部

元日　改年　若年　年始

正月ことはしめ　屠蘇切鏡

門神棚　かざり縄　書物　諸物

きり始　弓始　年男　大小く

鏡餅　羽子看　門松　ゆづり葉

寿ごと　なね　放鷹振　たま

ふりく

何れも年立ゆかんとすら

神代ぞふで松は不かんり

よせく来るとふきぐり

ざ成ね家国乃とこくさ

になぞへて老年を祝ぬ

門 へ 利5 諸 2846 巻 1-3

九重の上には四方拝
小朝拝なんど政事数多あれど。
地下にはたゞ〳〵沙汰し
知らずこゝまざたにも作らじ
すれども只見てつる四方
山の井はとなくうちかけ
こゝくのひとしれ共宋客
客気げさ行てむるりん
れかもいる懐炉も池乃
鏡餅をさんつりと投て。
ちとせのけもも〳〵あす
家老の内乃ん祝儀どもも蓬
菜の薹などまて不死の

薪松酒なむやうれゆるり
らうんもとやらうとして。
堪のふくいとふているる。
かまへしめかざり肉まへ家
まりぎびをもとむく庭まへ
庭かまどふうぬつてまう
とあなへぷあやぴと
なし羅のわうびごや仏
やとりひ極ひ座屋れ一裏
子こもぷ海子をいるべ行り
まだいあやうどれくかごう
なんごいるふてちねまへ
ありのみ行りさ海掴まかと

いよ徳者の説とし出せるより
まつとりよ下部がつる
にぎはひの名れをさいせ
ぐしさをまとれなそけ。
王ゐやぎ竹の家氣父なと。
詞のえん花やかにひとをせ
の婚姻そ此のんはわざさけ
立のくまとれわり竹ろ
まり
竹のうろひうつたること為
一言にうちう名そ名れ感
かも此にハ方きんていの夫婦の
わつまちのけしうる書やかけたら

氣情てハ風雅の所さられ
志んむ色んハ意の代つめし和例沢
けさやかにする日つらひ花の主
四十二のとし
ちうたまへとハやくし十二神
拵つてとまうにや家老ちぎの釜
立論るをハ之へ伝にそるひか
四十のちえへどうくへきを風雅
関东まて
けきむうふわつま鎧のもらいのれ
或人云此句ハ萬丸亜相公のこと
倉経よ佛る名ゆでえ日
立まあけるよぜをく

かりしんだんを
笘父歳母に八親ともならしハ　長発
万物の出る日やめでた寶珠　同
新宅を作て元日より
まろまし志けるに。
何ざうけさ笑どもも乃
まとを見て
取のりに料理新春まけ　同
正保二年の元日よ
鶯も三度乃声代と祝ふ　正章
菓子や春を仲にわきうこ　腐
さい姫の誕生日のうら乃春　同
陰いまゝ風にて八なし門の松　休甫

松立て道さぬ摘や門乃松　道宏
春乃日や光る源氏の三ケ日　元保
二度さうや夜乃開の神乃春　一美
京や九万八千年乃むどの雲　常倫
夜はあれ乃たきさこそ氏めハ談合
門松よりも腰を勝する礼者かな　屋信
雪なとする鉤はさハ姫まん
初りのつさともや年法の白
本綿花ともいひろ松乃
関よ隆なハおさゞりとのひ
あしハせり何かれ志つとこ乃
こゞれ春なとめてくさく
いひなれ

なごりハ旧臘はかこのかたハ三
けさするハおさめるにせう春毅に始元
鴻宗といふ所まぐいうて
乃孫重輝起せしと関東
よりはおさんありける。
此年の元日よ
旅けしごとくす雪ささやせる雲　同
ありくとをかりそけるやまむ松　可耗
門松も大本となれるよの或段
丈千八枕乃りこ元日に男ひ
侍れどもも近年季の詞を
らう人詩歯乃ととれのとけさこゑ
鳳凰も世ひり出よともに治

まる時をはくれあどもを
いひなれどうつれ日出風う
おもく事れど行る鵝亀。
千里乃外をわすれたき流沍
とおさへ行の園生も万字
乃敬うるそふ深あると説く
てはうね　あし侍し
鳳凰を出よのとけきなれとし
かふるやかんこおけむをなれ年
去年より降るめてたきことの
寛永やおけせさいなるのとし
生年國なるよみふて又
なれとしゆうりれ元日

祝ふわく
年とはとみとり徳あるやけき風情　正條
年ハさふとかふとさや喜悦(きげん)の事　日ぶ
都(もえて)の正月ハ世乃はぬ有り
かゝるすゐとぞおかしき鼠(ねずみ)
とりめがきこえとのびお海こ
鉢たゝらでとなゝけ歌々の
福つかさ内でもいはつひやね
おきむひあどいひ祝ひらき
まめいもれうとあどやうに
いへ流るゐこ此ざまざ
ことくゑをもこと彦店
ゑれぞらん心ひ出く白

おしはくねんごろてえれさて
にくかつれ商まうに縁(ゑん)し
うるねとぞいひかるへきさ
りや

立春

若水　くみ井開く
口ふれある

乞ハをくゝ喜ふゐりされど。
谷うち出る鶯(うぐひす)の節もぴい
やはひげる声かしく新の
はるくもそくくと琴瑟(きんしつ)よ
まうふ音きゝて柳まやつら
梢(こずゑ)ハけきつく風よ志すひて
ましぞね来の梅もちらぞう

まなことえがゝしてよ
はづのびらかにゆるかなれ
んをえらぷ元日をひとし
されどやまるとろきらぬ
わとなるともかれどされ
年によりてがハんを碧る
なし

春なわとのそえうまるやかざり縄
うまに若ちくらるる日定ゞ
めくまれてうりと之れ花の書に正式
若水といふハ大裏よ立日おつか
たより流れ生氣の方の井をと
紀しして。かをしして。主水の

うくふなるりとぞもと
はくこ井ひくともいふ。
いまぶ若ちらぬとしれ
元日より。まへき事なり
何ら氏。立春の日なるなり
なりとかや
若水なきと出づらへゑさはるべ
立春に汲むり行われて
年ハ始そらひ若水ハ汲て示　常倫

子日

ちよ萬乃松　ひめこ松
若松　女松　男松
いさう松　萬歳松
子日乃遊びとしてかへく

野辺に出て小松をひき。
または人をことにいはひ侍し
ためしとか。松根に倚て腰
摩れば千年のみどり
手にみてりといへり。
志をひかれてよめる代々や
へんあらんともおもへり。俳諧師
にも。野は母松に膝をすり。
女は松かげに人ひくあと
いひあふし侍るに当は大
かた松をも引とうたれ
ともいひし香のかほりの日。
かんざりかかり寝ん

うかれど興をもし侍る
松ひく人は海松ぶさ子日の悪
ひつぎ日子日初めは
正月の子のこもりひと日なる正始
子日七日まで侍けると
松かりも芹の根のひや暮の者　休甫

若菜

おつれ　紀氏堂　すずな
すずろ　ごぎやう　うたまれ
くくたち　名入か　七くさ　なづな
さく　たやき
青きをつみてぬらしもち。
みやべも袋をさげてかつみ
あげかはかしとちんじ侍

此京の町にはさめがかゝる
ぐりとてこゝろ候買へ
て唐土の名とおほん此名
めでたくつぬさるにとるや
見とうちんやにされバ廃
鼓とくはくこに挿ちざり
きらとも。ちご琢よよせ侍る。
義家よ調ふるとのたまひぬ。
薬刀のちやれとも。ぐあし
とそ口さくもおどもいふ。
聖免りまでせりさも
としるまは仏の坐ハ蓮台
聖まそつき禎ちか家ハ神楽器

の標康よまとめるかなどの門
ゑまうかれ弟にも賀ども
て名づけ。上古れ言んとも言
を賀えし執を祝し侍るれバ。
そんでん侍るべきまや
深く有こでも在にいろはまうの家
こそ此等もそふハ七種の和方家
おはれも云ひゝハ君なる和哥家
はきてぬ安ハひつくまちれおか
まう神七句を侍しよ
籠母与義範とちふんとつひあ業八正章
七ちまやるまへてなは坊くち余宗
急ぐ葉つひかてりやまき風葉島　正武

まつの尾なる蓮やが仏の座さ 同
志らとやこしゐすりまぜも
てまをれと印しされて
うへありなからもてらてしまう政倫
かり神よすゞ紙もつゆやさんばさう元次
くふいは白なるれせち念りうく
かるや天子のえいらん作に
とするれど。山井りゆくと
いひては。舞の駒とともうる
うひ。麒麟(きりん)ありとりよせて。
七草よとちとかまぬんれん我
いひかる
わて事の山井にゆくや龍の駒 宝永

三毬打

とうとんど 吉書なくば
ひし花びらわらてもと
禁裏 仙洞 加茂蔵
上古はうちし毬打(ぎちやう)を。神泉(しんぜん)
苑(えん)まてやさなけ。清涼殿(せいりやうでん)先ま
池(いけ)にてそれ掃(はき)しはるよし
されども町(まち)がされある
けしん。三ヶ日かろうし。
なうちのゆづり葉にも志ぶ
と門(かど)はまさそたか松竹を。
一門ふ葉(は)あく被るりあり
作(さく)りもし常扇などに結(むすび)つけて
風流(ふうりう)をなし。ざ文日にしさ

曉(あかつき)おきはきそくねらう
かしてやんどやおかんと
きやし。吉ちてもおけゆ
侍。されどひのもとやまう
どうえかれとも。かげょな
やとひどくへやとれといひ
つけゆる文ちぎちやうを
讃(さき)るおもとるへてよろしいひ
なせり
ひやとやたらどこ嵐の亭と云う
むつき中宮日乃秋月りん
ゆりきつ。季ゆ子うう
きうねけるよ。百人一首を

よことめそゆりかれく
たかし所行やそうご左定家と云
余所(よそ)おしるすい去しれば。家乃
風俗(ふうぞく)よは後(ご)世日ぶんこれど
いつ一事いゆれど。元こよ
まれいそひですども。は
とおさめとかくしゆるやよい
まこうるれる子ぶ万歳(ざい)も。
千町(ちやう)万町乃あるたひもかる
よりいか門(かど)ぞることもかすん。
かし骨(ごう)乃鑑(かん)するまうげ
乃よひとけさの粥(かゆ)りわく
するとて皆うちかけ。

いせゑびをとりそれらが
ど。大服かおほくぞ旅ゆく

残雪

雪間　雪垣乃あと
のこれ雪　雪汁　雪あかれ

もしきえ　とぞる
帷子雪乃村消ぞゆひの
かねてまくらとかへさて。
餅雪の積まるとぞ日の氣に。
かずりさらしといひきそ。
山雛の化粧をとゝろそげ。
山姥も宿跡もたくられ
りんゐをもいひなし文
秋の雪つりめにえてぬ

龕尾を佛と作かし。
律の雪仏ハ涅槃をも
まくそちらくにかうとも
いそう。桜しみる夜より
むらひてハ露乃衣れ中
いれ乃まるゝともりえかし。
えるさめにハまじ流され
らつきがともいひすれ
ゆきつらに薫風去の花の　去来
俵子やにとる春乃宮　正恵
春乃氷ハ。日足よけやつら
も。風の手につぶかさりて
ひずらへみとらるやしもし候

あやどもいへり
薄氷をかさねてうすき衣わけ
霞　やへがすみ　とも霞　紗とも
霞　夕霞　霞の雲　霧の衣
一すぢ　二すぢ　たなびく
かかる　色々
秋はかすみとなるを。玄賓僧都
の衣かと何やしこ。けり
しぐれるを。天女の羽衣かと
うらひ。不動坊なりかと
みなそのは火炎の煙よりきし
何ぞしか客はあるひとを。
折りの綱といひ給ふ絡然

深くは和歌の浦とぞいへり。
霧をとらへては武蔵野を
白からぬ又月のかたちをかぞす
ことはかくは紫うる人
の愁をそへ。えげ山の頭巾
んは海きこあどみゆる。
吉の眺望とはいへり
ひそかにけさ二書のには
仁和の山の霧や層はくて
九重の山やと吉はひとかすみ
四方山よかぐ海き霧のか
さ姫の十二重をかすみ
乾坤やをと好すみの衣かこと充

うぐひすの声や春の納の衣　加友
衣ハぬるとしかすとく
梅うくもちらちらり
作りみれく
宮もあも十種やうる春風を　正武
十方八方そうあのするかすゑ　正頼

鶯

金衣鳥　箕をえて　ぞ子
さかる　吹へつる　花に分く
竹ま生る　笛　琴　ゆう　人く
法花経　三光まゐく
笛といひて落梅曲と
さてあし琴を柳花苑を
いひかけりは法花経とすくと
いへん經よびといひて初音
ハ序品よりまさりなくハ
分部なといふりちりそ
すべての經をいひかうんハ
いはうやうちん。みさる禁
中にハ中の詩を吟して
詠るまは喜毎年
くるともいひ梅暮とのこ
枕とかくして撥児よ宿
ともかつらねんといふり
とれつら鶯のこや園の竹
法華經で鶯ハなさ鉢で作
鶯の声ハ法花経乃乍中に　正武

きさらぎも江戸や鶯笛の初 良保

春雨 このめはるさめ 衣はるさめ

うきふしも竹もせぞ
ふりくるとはしらじかしまも
うくひすもぬれてさへなく
あかねさすしとしもなり。
ぬれてゆくとゆりつゞくまく
桜のちるも露とひとしく
それ青柳の眼を蛇の目
なといふかたちも見えん
ともいひならり
ふりくるはけはるや春雨

春雨は花のうらさきつゞきされ
春雨やものの音のかゝる この花
あかねされ嫁ぬれさる日
春雨にぬれつゝ宿かり衣 伴雨

梅

八重 ひとえ 花の兄 梅花笠
宮人梅 紅梅 初花梅
宮前梅 好文木 飛梅 緑萼梅
行春梅 綾梅 紫陽梅 星くづ
梅がち 黄梅 こぼれ梅 かける
句なし すゝえ 難波 小野
花変風
かくりとめてには梅脇も
梅花りよせ紫射の忘れ

宴ともはげむ。古来ハ沈乃
わる。栴木の伽羅まして一へ泉
をひとひてハ今世ごれ焼り
いひそて雪を香爐乃灰か
しかれハ。又薔薇堂の纏頭
梅桜やり梅や十文字など
こといひり。花の兄といひてハ。
名ぬ月よりくれ。曲紀乃
あをはきまつとも。世まや
色ちえのなどきこえん硯
求む。被菅原乃神木なれば。
からる梅を渡唐の天神紅梅
をうきてん志んのふ郡よ

をうそへし。花文左中将
ハ。梅のひさうにちらなれ
けくめを思ひ。蘇子瞻きなり
こし花は李杜權をとも。
見出乃古事をもきより江
るらんうし
めるものの沈の香うる梅の花
梅が香やものねとこの卓香炉
花袖の句ひかく添う梅乃花
朱にけるやみる月かく梟梅の花
やり梅のそれつなと名合ひ式
過梅ハ太名行の中ことうか
金の養のをや一鳥とうり笠

紅梅乃花ぞひらけん来唐笠
小野とく
紅梅やうこん染でがくれ小袖
られて見よられ呉竹の鶯宿梅
かつ梅もんれの名はやたらてと
小野の百句巻おり
何われハ誰も寂梅ぞさくらん 花苑
梅ハ皇今をへござまる小野が 正式
ちる梅やこずゑりし又皇ぞ万 同
もちろべれ花れさけし
とぷりの名をさり
共をくく家童子れさい
あをゆりくれく

ぶるとうハいちや庭の梅もきおが 鶯言
匂ひ来るや又ハ文人宮の園の梅 袈
梅乃花さうりに
りゅぐんよ何れ来るも梅れも 囊
柳
何とやさき 糸柳 邦柳
むれと雪女 名くり柳
糸柳 さし柳 川柳
川ぞひやなぎ 岩柳 若柳
三よ柳 めぐり柳 柳 [illegible]
枝勝 名すひ みそろく るひく
春風まけつる 枕池 岸 鞠場
柳ハさかれ姫乃みつかとし。
まくらぬその琴れ糸みとくと

はひれず。面乃かくハ風丸
けづかりしきちくとゑがゝれん。
川邊ありをびかるゝを求ようり
ひくまゐりし流(さゞ)ひをゆる
といひてハ黒風(くろう)きん川(かは)柳
みどりといひりくれこゝず極
といふ名(な)はよりて気力(きりやうく)
みしと作(つく)れるをゆるしがたん。
錦繍(らんさん)乃ちらしも乃もいり
ますゞとハおもやくやさとふし柳
きりくゝ丸柳ハかゝ丸ぐきちやし
柳がとふきくべしおやゆるかりし
新田にハかまへ柳やまうかやぢ

大坂清水万句をきれは
わし水ハ未無邑(まゝえんぐわう)風柳がみ出現
とんれそれん柳が根こし一雲の
あぐるるやうえ死すきご残る霧　後楽
小熊(きげうと)かよらず雛(ぐつも)のにと柳　一体斎
ぢきわかに柳のうゞやみたり一条(じやうさき)

春月

臘月　かとむ

霧乃内はまぎるゝめくさ魔(まされ)じ
月鏡(かゞみ)つき衣(きぬ)はまた乃都(みやこ)の内
みどもひみしみずみぬ世。
古鏡(かゞみ)なをたとへ陶(ろふ)作れりと
木乃名もうせおくさのも

はし〳〵とよする詞を帯地に
おしなぞりれてものつ
千金とかへさる春乃月花乃　六條
佛の御翻も春の小朧月夜に　三宅

春日

遅き日あり　永日

春の日はめくる所遅きといひ
そろ〳〵とやすらうまやかりし
とも打たやゆくあど〳〵も
いひ語るおもしろげかうから
乃うけかうしとも
てぶれきこれとへに之れし
ゆかなへし

ゆかしきに物まであぼしく文春日あり
はるいハ山鶯宗鑑法ししをとや
露滴枝わらう永日風守　正章

仏別

涅槃像　栴檀乃煙

沙羅の林

天竺跋提河乃ほとりまて薪
尽きひし日なれ仏像と
わくゆかるぐに涅槃乃
絵像を掛てまくれ結ひ
結ぶもとあされなくこゝやぞ
ど川の鼻されて鳴竜祢
えん象のいかりもさべて代
跡乃をいまとゆかへし

しき物を異されたるや雑の部
清瀧もしらふやかれまうりれ秋冬の部

・花

花乃都　花の雲　花の陰
花の海　花なれも　花の錦
花筐　花摘　杏筒　花の兄
むしろを　花見　花に　花の綿
華の方　花筏　ひろう　花ぐさ
ゆふされ　つみ　ちひ　匂ふ
志がらむ　ちる　嵐　こぼれ

志賀

花とハ桜をいふどいふべて
只て千草万木の花を云も
いふりかる。花をもとの

一桃の数ハ千金にもかえ
がたくたる事なれバしさて
ハ今ときかなんし我るハ
よそめも何の花花をといひ。
おどろきてハ落すとも見ん。
桜ごとかとのひぴひるハ一日
露桜もわすれて見ん何
ても。昔の事を悲しこぴる
と桜の。面影を親といひ。
風山風をたうくこころ花とせう。
花見めろ都ハ西施の胸な
やうしよりいとたしく。
花の見きにハ妻妃もそう

百乃媚もうしなひ孔子も
さつれなどいへる顔回も勝て
うちねられすれなへしあらく
やうにぱめてきてふんとぞ
やといふ
ちる花と高けそゆく風や
山白ハ空也の作とまん
花乃塩まし酒乃小筒
行きとうなれく
太ちや酒のこそゐ花の茶に
なをりやとねこ海老やこゐ松葉
ちなちなもゆくあいは来風所付や
花ひらにかなくなの花の紙

花ごとりそありよたかとゑかりれ山
吉野すりで皆たのめりが吉野山
みうりのれ花のさうりや空海僧
猪でりのせよんやうさ花の主
花ひとつ茶とにとが尽子花や
吹わくかな花や主風たりきてん
人へもひとつさくんもれや花の花
花の名にや悪事の雲風花乃風
花と毎うてき松ともや後の親
ちりにハちらぬかりより花の毎
永毎より花のちり行も
冬かた
子にゆかむ親やりよせそ花の毎

ちる花のあらしや風車　同
ちるたいは美人かろへちる花か　露暑
縁舞は風流ちる花ちりて一見か
鏡んとこえこうねもえんとや　不探
ようき酒や吉野部にたへ雪月花　加友
たとへねと京のむかしのわりけり　元覚
花の都すべてあきれ小謡か　良保
花の雪ちる瀧の音や揚巻く　懐甫
おおきりよ花見句ひのわけく　同

櫻

山櫻　家櫻　糸櫻　うぶ櫻
うバ櫻　彼岸櫻　火櫻　姥櫻
小櫻　楊貴妃　くまがへ　熊谷
きくりうや川　たいさんぶくん
普賢象　いせ櫻　車櫻　犬櫻
桜かり　や道　ひとへ　子宝
句ふ　火とほし　ひとく　笑ちる
金龍　金龍る　祇園　清水
安芸　藤る

春ハ櫻ようろうかされてへ
乃山かひよのうへんりあり。
櫻乃本色もありて。吉野山
ことしびはやぶれへん火櫻は
待こがれくとも。ゆく火とかを
はともひひ。糸櫻ハよまし川
とつきれたるれがくうし　など

ちりかゝしゆくめもなのや
などゝ色いひはこそめの桜
には平仲か哥ともあるし
散ちるとこの哥へ。普賢象なりしハ
未つぼみなれはおちるともいひ
なら桜のせざくゝハ神護を
らせ。彼岸桜とは天の悪ぬ縁
とむらひおもしろくぞそく。
ちり白と折言はをそへく
こゝろ作意あるへし
二季にさく彼岸桜ぞあはず
小桜のたやめでとりか春の袖
俤てもなれ亡き也とひざざ八重桜

妙ならで今やさそひ行ひ家桜
めくれゆきひらけれや家桜
はつるものこゝや万句なり
やうちひらむれのやもの露
それにて盛おつれかあんさう
小桜をかさなしゆくはしみ
寒そきそるやさんざれ初桜
めかけそ山のはこひのたなごろ
ちるへてるやうぞそく　姥桜　西亭
思ひ母の墓所やけり桜さく
うへの行るかくらく
備性は行やおん物ぎうち　同
白色乃花の音響象　長荒

花乃波も八幡宮の桜かな　同
蝶るやわひ借屋さへ家桜　良保
も摘をこゝまでさそり姥桜　立圃
きのふみてまつりける比
きれいやうらそおかるくかい桜　勝元
ようきなす風の今いせ桜　正伯
糸桜ちらぬ桜も落花の躰　正忠
思方の花のまさきめ風さらむ　同
たく山ハまちやくが花の道桜　一滴

椿花　伊勢桜　志くお桜　つくく桜
ほざきまちらせつき　とびろ咲まけ　桜こら
深んきハやちらくのあかりのぬ

又きりてお桜といふもあ
りませて琥珀珊瑚あを
いひなる桜餅とハ若葉のま
きにぞたろくつゝれ出る
摘なりにあれ餅のなりさあ
ためしれどいひ初らし。
花いせ桜とびいりながら。
さ名ありつるさ家作系
はある
花乃精や千穴方くえれ御桜
小桜のくおそれハちりけ水
梅櫻ハ春乃京袍奇連衛乃
命を此ハをとる毎にする花

のなともいへども何の香もなく
見るもの愛(あいきやう)及びされハいかゞや
ともいひ出るなり奥の
へしぞれさへ大桜ハ花さ
かぬ故の名なりといへるぞ。
麝香(じやかう)桜ハさくらの台
ひとさへめでくされも文の
趣ありしを作らめうるを
何ぞうにみぬ様ハせぬが
からに花作る人きぬ児桜(ちござくら)と
いふを小桜といふへなき。
またとおもしろけれバかう
やうりしいひ来れり。

おハされとこうしぬべき
まざふとも何ゝにぞいはい
術のひとりすでも作る
ゐし。又梅暦(たいまき)といふす。
もかれおりくみそえ作る。
されどうびくむ然ご
よもふとのひおおやまとハ詞
つまりて定ふくしなど。
かくよき何へ所くくも
作りし。絶る詞(ことば)ハ詮もなく。
優(いう)なるもよつめ所。桜の花
ハちとあれくかぞへつくく。
其性(きしやう)ふ思議(めうき)の名ともし此

ゆへに俳諧乃花の広さの
とくすれハ何のまても
いひへかあれどもこしらぬ
人寂しくハ作者の様子も
ありぬへし。又頽景色を集
てひきと百合なとつくる
出もハ料乃事なりけし。
扨も花の何よしなきハ
さうなくに紫菊一さん
ありのひつしんハ又真なる
へきものなりや

海棠ハ　稀なる

稀なれ海花といひ侍るハ。
人乃目ハさむる詠といひて
やし胡蝶の夜するんとても
いつりて又海棠のねむり全
ハ楽妃のまたるゝ事とも
よ約侍る

うぐいすのねするいびきの花の風
なまろや花のうへうある月も宿
　　ありのまれむ　こうなれむ

梨花

花とハふたひ梨の肩をならへつる
ものを梨にまとやなり。その
花をとらへてもいひ白く

さるゆゑはちりしく庭や
掃るゝ地もなかりせり
花もまたちりしく庭や掃梨地
名所のむかし乃波をつくりしに保

辛夷

おさうこうず覧のこぶし
おどりもうへなきかがり
こずゑにわひこぶし
といひかけてもつあはし
かれめ八乃こずゑもんぞ

春草

春草よあらそ花みんな
ゆさこ 眉作 はされ

むしろ草はまるごと何の際あん
げかなんぞすれば志めらく
はめどもかをけるなる海。
音に萌葱乃うつはしげし
うるこ氣又などもいひすれ。
まんがくの花はぱちの三
とそてなかれべき又音も
所ねと小鼓乃音りて
名もとり物で営れ笹も限。
こそみれ華乃内あらどもを
いひあらはしよめりつるなき。
かの中ふみつね俗語なり
よりて志るとかこれつき

かなぐりひきむしりわかみと
ともにひみだるゝこゝろのうれしさま
ありたるとも
中よりかきくどきと嫂の兄
嘉家の子にあいする妻やらあゝがわか
えんりはあんなにうつくしくてこ
たんりなりしそ弱乃いくさ鼓を発
足よりものきこそどんなか荻徳え
悲母乃進呂よ
せっかくや叔のかなし此眉にわが正妻
四丈れ方乃こゝろやさしくきく身
スやがて柾にひとつや三葉芹音之
鬼かさなかとつてつまらぬが

すにかひふそくやもうし
くいひあし作し
やなさこ乃みけまふかざこ
れかりけるを
根とうえわざろや鬼にかかわ緒
はくしはかりく筆あり
とりあしていひ給文こゝろ
ころゝありくるとらといろ。
れくしつひまさへかう
しひくとゐれきつとう
さひ給れはゝ卵乃えんも
かめるまや
いられ筆にのまん着をつくし

秋色に道遠しして
ちるとも見ぬらぬるかへし　猶
高秋乃名木に候へとも見られ
ぬるを作る心さし此
歌なとに用ひ候へは御うら
ぬ句たりや候ん。さかい
つとみ調葉乃ないさる程
遊ひ乃折ふしとも
めつらかするに極ねらち
すさひあふいつくはせん

蕨　ちらし　かきまうらひ
もらひて　さる　ゑ見
御まゐは芸と作まる候。

御無事りハわくれそい御返
いひありゆる文蕨御状
大仮そかく三業乃境の
あそひ乃うらちれかう
ふいにもいひあし。御のか
もらひ其後わりいひわけ
てひくにのわつくんし
ゆる御頂遊人よりいつけぬ
世れこそへ御とこれ出ぬし
去年山ハ其ところの蕨や
ふつくへてあるやひくの猶もひ
日足もりやひてあり山出発
さもらひや御風雲よりと宮西より

たはふれも道へなかさるゝひ加文

堇　はなすみれ　つひ

花の紫するにすみれとい
へはなことなる精霊瑠璃の
壺なといひなして壺すみ
れとも

長歌や風なき花もちりすみれ　梅翁
花こそや壺乃なかの壺すみれ　其晩

山吹　定家卿　やまふき衣
井手

やまぶきははやことを砂金　吉岩
袋さりと金峯山ちり

しらかねと金なれでなのどゝだ
わくこうのふいびおせう。
山ぶき乃衣といひこゆへは。
みちどれかしこをたぐり
姿とよびかんのきりん乃
ありさゆゑをもらえしら
あしれ冬なれは拗いさぬ
花くしとよき実なれおぶれ
ども語りえて作る
やまぶきれつれなは砂金袋衣なり
山吹のなやうせん金峯山安晩
ちらすぶ乃ふ山ぶさよ
まつられまるを見ゆりて

山吹やたへ行く春の名残かな　宝馬
山姫きやえいもわかれ花衣　長式

躑躅

岩つゝし　しらつゝし
蓮花つゝし　錦つゝし
杜鵑花　アしげくさ　嵯峨の檀

春乃日ハ永するにあひ人色
小倅(こびん)とえそ食籠(じきろう)小筒(さゝえ)やう
れ摘おゐひくまさげ行う
くめ例ぴんゞし山行べり。
ひら花いとにちさみちゝる
とゑことえ花り酔べき酒
のつゞしとゝもれ外(げこ)花めりま
行く錦(にしき)つゝしあとゝもひ
とて嵯峨(つわ)乃山邊(べ)なり日と
ふゝしてはこさ赤かる八重乃。
久く和(わ)わくかざせる残。
小袖をもぶんれはくじとも。
又山をつゝいやぶん袋あと
いひかけてそこられ雲(けう)を
も埋(うれ)し花花(そ)けくじの
色なり。花にご蓮花(れんげ)つゝし
乃香(か)まめづるらんへり
こゑりけ名ゝ所絶とも
行るべし
嵯峨山をつゝはくしやぶん袋
錦あはつそかやこゝあうつし

ゆかりをやかざるきさらぎる岩つゝじ
きくなずなはゝきゞや羊の乳（ひつじのち）云草

藤

きしふぢ　落流　ふぢつゝじ
ちらふぢ　落つる　ゆかり落
はらふぢ　ふぢの門棚　松がかる
おかし一入さ　白のし
ふぢの棚ぶ　なかるゝ花の白ひの
棚ふどいひめし松有
さがれるを松笠の志かとも
姫小松の帽子やかふしかと
もみぢ　池水　かゝり
にさく池波りまゝへ門口
りまゐなるを落ともあゝ

ふぢの花ぶどいひて家本仏
絵みとききて　ありゆく
先を又句ひ乃さ花ぞふぢ見ぶ
門ふにいちさの物やふぢの花
ふぢこ花をむがうやくら松乃やま
落こふや花よいとひ風毒腫（ふうどくしゆ）悪
ふぢつるやもみん下ちれ下地蔵尊（ちぞうそん）

海棠

上るくかり

花を見じ地見をてくいぬるを
うらこ越後（ゑちご）の宮女とやらき
ありとざれけいふかられど
たりたぞらひては吉べり

かへらぬとうしやうぢ友と志るべ
しるを僧されどもりハいつた
とこでむかんなんをそもいひ
作る秋かをこぐれまゆく
をぢめる文字とかんがし。
まいひあれあさうぶとな
とこもいひろせり
花のかもえんぐやかりて姫居
千里ひともやなくて命あり
かりがねの塩竈のゆく書かれ先発
咲くハ磁石の針が北家居立圖
雑子　こゝし　ゆき庵こされ
子習よ　住庵二丈

やけ杉　禁野
野山やく此ハ豆よくれ都
子をとのけり見てぬのあん先
戦きん〳〵とおなるおもし
こ塞にゆふても獵師と
見ゆくも洞のかわく燎もへ
あく鳥たそれおかし衣
なる物とおぞいひあらう
作れ。されバ子をやふきうぢ
ハ洞のかわらともに寒る
わふてあん塔やう新
あこともゆり
子を〇ふきしおかる人かわかぬ

子ゆゑや扇の地紙のこがれ死

胡蝶　てふてふ　何となくてふ

　蝶　夢　稀なる

てふてふは菜の花に遊べり。花に宿りて余念なげなる
ひるねのたのしき。羽衣のたもとをひるがへし雪とめく
らしつゝ舞たはむるさまは
荘周が夢とよ勢て。こそみれ此百年めぐと
さとりけり

ちるやこそ風蝶の百様ゆゑ
津風ゆくいそぎりしつゝてふてふ舞

まひるのちりよりもなげきの蝶もあり
かへんの縁かこそよその夢見まひ
そふ我をてそまひの芝居や
何處の中にちひさな蝶や児の舞
ぬるてよの夢あやひらく花下蔭

蛙　何となる　かへるこひさご家

　井手　田池　井のうち　萬代

かれくとなきて声をこふ
といへん。天蟾といふといへ
ひきがへるとも世を
捨てすむ沼りとも知し。
露の玉かづきれ蛙かと
いひけ羽衣しるなり

引こもりの弁のうち気にいる。
でんどを志らぬ人をもし
侍る。文なくはすむかながきい
哉よむといへるすがたにも
見えしは。そのがにうらへび
かくのはれて命をうかん
じりくさなかじとをもすと
いふめれど。文武二道かくそ
ゆうがともきこえて侍し
いつら軍文武二道のかたうな
かるこ成ぶゆうわるむ流のか
猶吟ずる句集にも
ときに師遊なくうへとを　幢

名めしかくかの所のちむや廻文かな　未徐甫
くさん乃四も弁れちょなし　惟長

三月三日
曲水宴　柳　桃乃花
雛桃　闘鶏　桃の酒
蓬餅　くさもち　鶏合　ひいなあそび

そのかみ曲水宴の盃のかみびとい
ひしく。桃乃花と柳のえらびてそ。
そうし銚子瓶子なとにはけ流し。
人みなこれのいけりをとり
うらひしもゆいとし現
俳諧にハ桃の酒といひ侍へ
ぬ。文こそれ花やとをも。
なく股めるふ酒の杯あがり

よませてきみれ發句なり
うたもちゐるぞんもぎの行
もはくゑすいかしれ丈なと
給め給とえゆれんとんが
ろう是もなふの訖なりとを
へて皆(せつく)作なとり玉ういは園(その)
の桃なく王母(せいぼ)とよせて三
千年乃蟠桃(ばんとう)にやりぬと
こよふきの門乃柳(やなぎ)すねえん
めいがなとかりて命を延(のぶ)と
いえひあしてきんとん
へなひつきまや
説もなの東方(とうぼう)さく園の桃

おぎろれといへやう飛の草餅 長寿丸
曲みえんはふるうは桃花(とうくわ)なる保
うちまる所にやくきれやもれやと悪
やよひうきれ日長み丸へ
まうり待しおりふふ乃
作にとれるまひけまえ。
ひわと出乃いとなされ
ゐえるてと待しうう
かれうりゐるのまもえ
給んじあんれ待とか
けるふぢてうきしき
わしくそ節供なとい
へんれよ元乃家。

主作おもらんハむかしの
ゑすなうりとせいきられ
待られん
呼ひがらふむやう元禄の作意
ひいお藤ひとゐふるす。正月
の飾りハ、つらりし三尺
あり。煙むかどいひて。飾り
川やうれ物まハ手をさへた
かまぼこ。夕ふの昔借とあら
むかく。大外れ十分むとめも
長者れをとひめをも。ちいさ
ゐうある屏風かんうらり。
たりひけよろ物。おつかなど
やうりまうすひ。むいた重。
年れとひめぎこ有り。柳
のかさう鉄けさせ。桃又の
居てにうらちうすを。つ。
いなるこなるとし。待。
あやらふとそいわきうこるぞ
らしとむけりかひける
はころとられきこゆる鉄。
ひこやこのこと。さハいのれ
世ふ術をわくいひもちじめ
くんハ義くれば。文集中より
鶏の名付めつくみ文鈔えり
ナからぐくようくそまつ

せめてをかまへれまつりの流
すくしけはれさはめてすり
をしげさ作るがうやられ事
ども丶いやさしき目の前は
まつひあくは春まありと
以前まつね俗難をや作ん
やよひのくれ　ゆる春

三月盡

蕉書

春のくれまは散意をむれいろ
かまとも桜またてつをよまる文
浸くそびひ乃種これより
雨がけりぱきそれうく
とうちなくまへ寄乃流
うつりまさるひ部まきこ
ゆるんで今歳のかうつる花
がりやとりなけちて庭の
かがりもこさひしき氣
文またゆく春の衣着袖を。
ますがごつあぞもうひかき
擱こ。鈍谷のせなとぶめて
こも鶴鳴りおけゆく春
のみ雅あさなりど。かくれ
抽しきさんがへとひすへし
蕉てゆく春や寓在かり

蕉書なり

壺廬　梅や春風かくまぶ成

山之井　夏部

更衣　夜衣　ひとへの衣

たちかさね　あはせ

わたぬき

ころもがへは。宮中にはくれは

御装束。御調度の御帳のかた

びらまでも夏のにかはるひ

おほかたまでも侍りけるとなれ

く女御をもふは夏衣かれ

とらもざる信にもまかりぬ

やみもともいひ又花衣ぬ

ぎかへてもかくなるをた

つらもぜきと夏の季のゆか

なじをいひ地蔵を撰て
衣かへ。まくるめく日も衣かへ
ものを志何し
位ある女御とよふ衣かへ
夜ごそやいややきん金やう衣かへ
春と夜やこなりゆゑ給ふかへ
えいひやめさせらる衣かへ　蕭倫
衣裄にかけなりけるかかり　雲
をりつめつるやむれ衣かへ　其式
ぬいでさる春と夜と味つる　淡保

灌佛

卯月八日は天竺毘藍園にて誕生したまへ。時に天竜
らふりてあまそゝぎ、伝にて
ゆふせ塞りみしてよわふ
日なれば諸る跡とし然
おやうちにも清る淨を
されて浮香所又薬たる
あと茶とき仏事なりと
ゆりしとなりみ言ふ
躑躅櫁などゆまへたの
ほとけのつぎに、彼花園れ
そしきをふよし、小ぐ
くやりふ銭うぶやれ餅ほく
しなとのひなせり

仏もやよびつゞきやれもちらしけり

卯花
卯花月夜　卯の花衣
川そひうつぎ　岩ねうつぎ
卯花の雪　箱根うつぎ

卯花は波よりも見ゆるとて。兎(うさぎ)のこし毛かともいひ。奥ともまたは雪なともいへり。はげめる残る月の影かといひちらしつる所に月読あり。やうを見きはめこそなるめ。きのむかし色くれさく咲けれ名の雪をもし花ことをいひなどをつゞ

月雪に見ぬせんじ雪月花一度にみゆることもいへり。雪月花一度に見する卯木かなと風に落しながら夜の月うら卯花の垣もうるはしかりあ

新樹
夜ごろちる　木の葉やこ
何とて　緑に　志げる

夜ごろちるは志力にうつりく。えくやく志げるなどいひ。薫緑(えんだ)りよろ所して見る日のもえいとをいへり。すべて夜山の志げミは。日影めをたがまれば(?)ふる

あきもしばしまけうれし
仙人もなのとわうとりし
すひきる物うるせこと
をしめずかりして深い
ほてしぬやうにいひあし侍
夜山ハ目のくもりがちんなり

牡丹

廿日草　ふうきぐさ
なとりぐさ　ふかみぐさ
ぼうたん

ぼたんハ重衡の卿のめでたまひ
とへ嵯峨后の名をもよ弱。
ほうき絵のかざこんぜあど
あもいひかけ。憐うらみて
のとびまいるんずんへ。繝せ
ふかれらち称ふりめるなと
さ海なりどをなる何あるやう
おハ花あん王ともてはやし。
牡丹ハむの冨貴なれ地
とこもいへり
ぼたんむに称ふるこそ子も是唐ぼ
ちかづり信やたまの花の王武
屏風の絵を得め侍り
けるなりし。発句せめと
人のいふりなれく
ぼたんそけふるやねこの牡丹手遊

杜若 沢 泊 八橋

かきつばたといふはかり
はなくて業平の名にもと
ゞめおける比所をかちまちくし
めぐりにゆふや垣根にる
ぶどうもいへり。浅沢小野
ふもよしなれど、此業平
のうたをめでゝ、また三河
の沢の俳諧にいひなへり
何ぎきやおりのむかきつばた
九のかにくや八橋は杜若　正式
名称のこゝろかくやむかしの杜若　雲君

業平のかくめんあつかひかなの花　良保
山がらくきはしきそきさ

郭公

ゆる声　かうたてなく
とらへてなく　名所　かく海老
声をよくはあびり　猿
ましして立花の付けり。
かしらをそへて来るを
古海し。うつろ川来れ
こゝに日をくらし　萩
何のれあら海。一夜は
にきかねんと字也の
とかゝあふりとも。山
あら〳〵書付るかきとも

いひおし上故人のめつし
さハ金輪王乃出世ありしを
うらべきしれ物いふふとも
かぞふみうげきにハ称ふ
とふかくともらいさ
こぶれありみゆるかど
といひそし為まに日も
かりそくかき。月夜ハ
こハいろをかくやうにとも
いひ花なきるけたともぞ
火宅ともかくらしつけ。
地獄ありすひともに蓄まん
かいこにおもし執ともいふ

ありうりごろしての元ん
ゆかまさ行る
わとばかりとなげハきぬ物言ふ
おゑるそんなけさわくられ
地獄ろにとちうりまけぬ釈
こいよこなる我中ぞうれ郭公
かの我し中ある元乃わらはれ
空そうやうみれいあや海郭公
あそうに一こゑそのれほうきれ
さ称とうかほなるみ名妙薄
はる月ハ寂云れ行かれられ
一こゑハそしやいんほうきれ
らづきあそ称ふとれいや時鳥

鶯乃ちろれくへとめけ郭公
かおたしへやのかりやそんの子観
あくにはゆくいりよ郭公
又吾らく吟やとひ出入郎らき以
いやめ苦海子どもらとすけ　子観宗浅
いつくの人乃曇くや郭公也花
きおゑやもさこすめ附多雲の
た神交清水
むしたちやれど紀秋乃きす　和同
どちか身乃あくやちれと子鸞　同
こうにと女風の我へかくまれ子観　傳甫
郭公我やいりあひ錦いりど　同
一般八はぐこそと物のほとくさ汎　幸和

又吾ね通とて　おりさとあいん
あとい子似ちゐ桜一つとし
しハ二つあとど八弦らかり
とゆしりど二なへてりく
世にまいひふるれくちち
步ヶ耳あととちつくとく
或人いひるしれし。
我にくさめしねまん
ことよいしねいきこえらへ
帆乃いりはるをもひねあり
しまや

萎　さま気乃おもひ　まハ名さ
いろ萎　こちかひ　は大萎

行ひは源氏乃君に
よせ。車あらそひ物のこと
乃御沙汰などいひ。あれ日よ
つゐでまつれ行りける。
よくわしきことをまねき
といふべくもなし給し。
又菖蒲告ありて賀茂
乃みあれの日を、あふひ
桂のかづら緒をかけしる
行るとも挿かづらなども
いふ賀茂乃社司おほくの
使へなど所へよそでまはう
きぬは行ひとこすき

ちやうおどしにかけてとせるゝ
言しきをとつくねなし
物乃けうむかふひのうへなど
足りや海かけてうたる葵、葵
なし　いなりいまうで　猿田表
祭
卯月乃卯乃日にいなり
乃祭なれど八条九条の
うぢこどもぞうかい祢
たひあとして供奉し
行る。東寺乃鎮守とや
いひて。南門をひらき。神輿
とゞかきいれて。御供備へ

それまつる儀式なといふ
なする
人乃坐敷より稲荷の
お山松みどれ氣多やま
でたし給ふれて
いなりの山まつりを庭にて八重垣
今宮またさ宗像ハさ流なる九日
なりしかどもと神ハき
経がありしまそして近江比
より十五日ありありし給ふ。
れ鉾指源の禄の抽おども
作かなる。是ハあれるとなや
ミた ありし世中さハ

かりけるにしてちなの
鄙よりやしろ完光ぞ。
菱原蒼能うるとあとなり
つるかかるこんまり
海さん座なけるゆもるや。
されば末乃世にもかつてれ
あうこれ古れともはず
やはり給ふへきりさまや
いまこや乃御まつり九日
まつまるや皆藤氏子むかれ揃藤
祇園会ハ山鉾乃言しき。
太鼓をあれひびきわたりかん
これこの風の拍子。山まん

江いより出る月がこの
詠め又ろくしやくれ
あしかゞされさうし。竹杖清
ける稽古(けいこ)図のさ海つるさう
れさしひき。新式のさき
以前などもすべて七日十
三日の作法ども。あけて
いひくうし。去りて山ほとの
ゐざうりいひて。何かがら
すり祇園会とさぞ給ら
でもうるしかるまじと
あん
月が乃出る、山れ何ひあ

祇園会や二十一対まつり
神事ハ京の鉾の高さまでしれ
まへ胎れ末山の奥の里
みるとき時とりとこるひ
行るされを示あるひまる
清式ともへしいまことく
さいふにかられ文去る
れよいと海老。さうて(こゝに)
の肉までうんすれ侍る。加
さうり去なしとうりて
出所くある祖なりし

夏菊花　芍菜　義人草
八　射干　雁緋

鉄線　下野　芥子花　百合

芍薬ハ鉄をも恥るまじは。
花のかゝしやうをえらんて
いはひ。鉄線花乃そへうけ
ともかやうるからん。又
酌やく爵やくなどもそへて
いへり。美人草はとくふかれ
野ま草もせとにとらぶり。
草花なりへでえやとも
いひ。虞氏かなきくいうむ乃
露のちふぜんまえもろし
すれなどやうにもいひな
見ゆる花やうんの花ハ虎眼

乃数をめでけべしとも
まやかまくにをびこれり
ともいひ給へし
芍薬にいはひハ鉄気のさの風
さとれるハあふさんなれや美人草
仏乃腕のへん。無りよ
夏気のそゆる一八の花もなる　雲
半月乃形やさし櫓らハ字　良
どれも花ハ下野になる所や　古宗
てつせんハ花火乃むとも
いひなし風ハやまりう
などもいひ見ゆるさき
まだ芥せんとうへて　也

しほる、
てんせんは花火れものゝごとくにか
なしすこし雅もや脂まてつせんを談合
唇緋(ずんひ)はかりおもひひける。
絵師の名にもいはれけるよ
達广(だるま)の眼(ずんひ)はおもくさいゑり。
かよひとして甲をさされ
えんともとめ
かゝ絵もやうとがんひの紙

芥子花　くし袋　千重　ひとへ

きしは須弥(とみ)をいれる家
ことさらよせんぶりけり

世話(せわ)とともいひ文清す詞
にもちへてよりぶりん
乃つゞちのこに髪生(はえ)し
よる殊の名し坊主(ぼうず)といふ
もしは花のちりさる頃の
ひとれバあかりきおもしても
はなれるへきまや
竹る門主よりぬ縁紫白(えんしゃく)の
芥子乃花三かとさ(とう)せ
給ひけるとり
薄紅(うすべに)やささごころ此花衣三葉

百合　さゆり　ちゃゆり　姫ゆり　鬼ゆり　車ゆり

ねぢりぼうの名ともよめ也
ゆりにいくらあまたあれど
てもいひ文車ゆりの花
のめぐりてるそくやし
鬼百合の何うら気ども
いひそめぬ
姫ゆりハ義斎やら女郎

若竹　さんかずゝの子
わかたけ　川竹
ちくえちく　まろけ
志のひさけ　脱破のもしき
とりけハ笋ぎとちり
らけとも世さけのかる

ともいひ。さけの子ハやぶ
からも椿を出るとも竹
る乃角やともうかひ。
みやぶともしちくれ也。
大名竹乃世にれバなどと
いひけ。ともにかご竹　蛙竹
の名にほあるくこと多
と求め行へし
人名乃名でまるけれバたに
すれにハたけの一寸からしに
女子竹のかゝにとるやてかさ
おや亦ハ竹もにゆづる事のに
親なの子ハやめ月宮

はなけや十五八くやぬらぐらん
竹の子やいく竹なれ鳥乃角　正忠

撫

柚のむかる
ゐ撫とこよくれ相子乃花

さらされよぴむしれ袖乃
うわりとよ毎をるすハかなさ
あにしうとこよぐり
亦りて萬葉りとめにし
おこり。曲丈の洞れかるるす
あとうりとうや。あべく
たち花ハかわりさめでく
さしな物ふともあへ。迷ひ
ころまぬと大かなり
さへ仰しそこさへむさう
とのさまひそくつらし
諸兄公乃性氏にまたよう。
花ともこもうらぐさる
と云ひあらせてし侍
りし乃ぶれかくちみと
いひつけ仰るへし
ふち花ハ云ひされ句ひか
乃むか御茶もくたちも乃青
門と出ぞやかじれむ盛
かるや改伝奥りよ
二十三れ撫ハさにまう家　正享

五月雨　ばかり　庭の海　梅乃舎

さみだれはおほかたへかゝると
みなり近江棟瓦となり。
みやこの文宝も海中の
龍文様ともながしまれ。
庭の松も見るく沖の
藻よあるひは井のうられ
桂も大海とありふろく
川も大井川をながむき。
浪浪を花よるりをやうふ。
色の波も影をひきたと
なんとへふれおもわくべ

かりほぐえていなふき
いひろれ
五月雨ハ大海あるや井桂
さみだれや出来嵐あふてん
さみだれや鼓の瀧のおとおかし
五月雨の矢やはたんぬすこの山
さみだれ乃晴るや龍かけつ風なし
帝釈やくさぶれ乃色の旗忠
五月五日
端午　ちまき　くれぐま
あやめ　根合　、永き旅
まつり太刀　菖蒲湯　まつりけ宇
あやめ乃菖蒲ハあさりさん
ねまつて泥よまふれたく。

ゑなわをひくなどへ。あり乃
うんちも粟乃ち粽も。さ
やかたちもぎかなりくされ
紙のかぶやさぶきちり
のぼりそなりんべし
大かたの作りもまきね
かざさる家の旅例。らくす
だやや作やかたんかづつ
うけおりるんとのけらひ。
さやう檄力やら長刀まで
天地よまうれる麻着乃
氣久なども見へし
小さきをゆる紙のくれやらやめ幟

なども京地ハ五月碁ちうハ 長松
ありひたま手作ハち粽きげらハ同
わきたやかずかしも京の紀ハ家
翁向きそきら作もえぢうひきハ流元
菖蒲酢ら椀乃ちくわうたるの水一栄
いふも又ほのぐむかぬち粽さハ寄棠
昔ハ一条大宮乃ふ南なり。
左右の近衛乃馬場ありて
三日より六日まであしらで
ほかひかそつかひとそる
にぬる事始しとそ。今ハ
賀茂のくらべるとかり何
かくく朔日ありしそろへ。

又日本にてこれ競ふる所か
是を将棊の駒の捨る
ありさへていはるといひん
やし侍し。それはこれはよ
はた近江のそはひとつや
きこ候
かかる事を鈍太なるまでやいはふるべ
賀茂まてるかる人も
おもふうられて
今たに寿うぎだをかけいて
将棊をて寿をけいはいば春雲
とかる　ほ　宗の雲
堂

捨子かこへしてを芸術で
のらひよりせ車ゆりあり
とびかれを空が足さの
うたいひあし。日吉の山ま
とふを猿の鹿の所かきに
らしへ。いかり山よちろめく
狐火うしと何やしこゝとろ
こしの癡紙がたまうとも。
嵐野の藻藻のゆへさりひ
かりすく私とゝもいひ侍る。
又月取らいぬとこ様をも
〈○〉閣よはえりをかりよい
ほんぶへ○為過ぎよ火とかけ

と撞腮ことも川の瀬中
のやいとまやとともいひ花
見とも見るしてすゞる
りし夜がひ罷なかしこと
きこ事
高野山答れども露ものも寝る
かうひでもわら露もゑるらんじ
あでもそろるや螢丸な夕郷
あさこひかれさるすゝ螢ゐ
河つれ火いも藻のまへれ光る
文字見れ乱とからの螢丸
螢谷河の瀬中川やゝと凡
消ても夜やられ螢火ひろやい

加友といふく探題ま
螢をとりて淨家まい
あいしらひを
見と文字金文字ぞとかぜ　正章
らくするへれをとて
螢火いてこひげれ光るや　同
月のあい宿やまはめてと螢　同
螢火や本院とそこに月の寺　寺案
何うしの浦り夜か
つとける時
あのくとあしとと見螢られ　一家か
雨ますく石山へゆて
作る時

えふりや沈のかをる光すかの海　[illegible]

蚊

杖柱　かひ　かり火　かや
かやり　蚊帳

蚊柱といひては蓮栗花乃
湿りをもちやれども
涼風のふきさそふにも
いひ。又山里にかひ乃煙り。
蚊のよるひでをさかりふる
やれ形の錦の糸り。蚊乃
もすへ偏さき。棒
かり雲化てふれる
とうやいへどもせてらき橋
乃下あとにまうぼてい。

蚊蚊とて森乃陰行の林
乃いふをくこくらき物
まなく鳴りおなかく
いかへとももえし
夕風は如何らをつるてかの声
塗はわりうるた如をぬ風も声
蚊の母を如こありはきて紙帳に
蚊にもくえれ去りぬの旅ね声
かの声は四丁四方れ先きに
加夜をとまえて探りぬり
蚊をとりて
うきのかにひびこむや蚊れあぬうす遅
蚊乃巣は如何れきゑの蚊帳に　[illegible]

紋は血を火風につく文殊かな　同

鴨　鴨川　鴨舟　うきね
鴨のうきす　かも火　大井川
いさら川
さつきやミの夜かりに出る
月まはすもどりけるを
き又鴨まはりて鳥のとん
ゐるとつき鴨の目磨るれ
目のごさうしきたとへなど
をとりつ結ひへし
いさう火や鴨のひかりの地獄の火　長坂丸

水鶏　こゑ

ことくせ戸をたゝく
やうになくなれは家
あまたかまへてくゐな鶏
とよみくゆる俳諧ちりは
うしろてききちらして
なおまちまわりも火ひなし
そのこゑにうきつえまへ
くいなとも
水鶏にうきつえ扉にかかれ

鹿子

きり物くわかくはさつき
りすむとうかいかのこと

しかりとてちんぷんをとは
ひとり京のみにこ江戸人らの
ことばのゆひ名付めゆ出ひ
なし深物のえんいひする
作何ゆうく給る
夕くれむさし野ゆかや江戸紀こ
やうになうよ猟師ハ志ぶ名紗なや
かみさもとつや布袋の乃ちの体甫
夕顔　ひとのちん
又位いと上乃家ふいろひらう
せぬといひなかうして
こくらすやの新乃さかに

さらへなてうかきりれめ
ゐしやかとはえぞと乃眉
新しきかかれるやうかり
れにしたハ又月うけ露
なども ひもひて又うわを見
似うしりんとともにひ出しいきん
何せともみえける
又かかやらいろふ露の玉つく
宿そうなよら夕顔のその花をいて
何さわりと見月顔ハそらめ遊ふ
夜月
こし夜の月　ゆやすら夕月夜
夕の顔乃涼しさとめでける

るのゑやきこをかしこく。
めくらは扇車にとらへ鳴門(なると)
や落る月の雨にもつら
ね附にしぬ白雪氷ともみえ
なして野山海川のうへにも
きゝとも

すゞしさ流しまくらあや秋の月
月影何かぎりなみ川瀬かれ
月乃轡めぐる八扇くる夜かな
夜風涼八なるとや落雨に宗
夏の暮月ながくくだつてや一滴

氷室

ひむろも　むむろや
ひのかまれ

ひむし顔田乃たかいきこ。
鬪雞(つけり)とつよ雨よ稍し給
きるは世中りし氷室の
ゆかるとこうんはあてやぞそ
帝(みかど)へうち氷をまれあひし
よりの國て雨こえり氷室を
とられて熱月よ用ひおり
ましけるぞひむろちん
御調(みつき)の權輿(けんよ)とりやいつれ
いはあるまんすらりしか。
こなたとさ朔日(ひこもれひ)へぎとち
わを氷りなぞへていく
ひよ撫し給ふらきは

氷りことをかきこほりといふ。
又ハ氷りをもいふか
なとゝもいへり。又正月の
かまどのかけ鯛をとり
いくふるきを取ゆる
東門院まで立花せん
ゑとしに流布らし出蛍
出家も今禅や新面乃杉の枝を挿

嘉定

かぢやうせた

こなたき十六日ニ禁裏
とつしめる衆乃うしてた。
嘉定の令ニ揃せる筋のへ依と

あり。又ようし志あれあら
くしは嘉定者議として
十六文ぐの銭ニて捨れかく
すまさく乃くだ物ニ於て
とられへてんかとをもあめ
ミくしもらひぬ
こなたつきゐ乃十六夜月餅
なりみえて
月もこゝろ出しおや嘉定会者花
嫁 世ニ求 言琴
夜氷女 ふ女 女これ羽紅
経よひ殿乃嫁り似これ 公
何まつりにたしや嫁ぶみあり

ともいひなり。樹上乃吟(ぎん)
の声ハなるよめるとかして作
まさん。なりしふさうらふなく
れせミなどもいへり。行蝉(せん)
なり乃翁(かう)の名などもよみ。
元蝉乃居(おまつる)気りもなるべへ。
又蝉の音を表して磬(けい)琴
御まするとりやをもいへり
されば其何まゐ云ふぬや蝉がさう
むのすでわれむかうやせミ乃声
から衣せミとも掛ぬや蘿の稼
しのせミ皆居よりてやつし乞弐

石竹　いしのきり

床夏

撫子　やまとなでしこ　からなでしこ
日本なでしこ

とこなつハ床(とこ)よりへて妹(も)と
ぬめるともよめれバ俳諧
にもめりからもせよ花鳥(くけ)
なともりしみとこなへりし
やともいひけ俗の撫子(なでしこ)は
小児なそへてなにをみやく
人ゆめまえかつりくや
らやうちくなどやされ

むの龍やところ鴫食異名氘去琵
やまきらんらねやミ凰蓉石卉乱
蓮　台蓮　紅蓮　荷蕖　芙蕖
浮葉　ますぎ葉　糸池　渺泥
忘分
んちんは蜂のとも評りも
いひりけ。蓮乾筆算蓮花生ゟ
ふどよせてもいうり。又九
帰の蓮露にも中物娟乃
手織とても於ひよ敵待る。
將ち滴れ芙蓉の本なりし
かにぞせ神めでぬれ憲子
とい縁んぐへ字も若く何

こしまざとさせがこころうこと
まや名れ卉て虎とゐるやう
なの竹なとまてせうりまんべて
此花ともその名さ論よく
似りしの咲ほとひとつ名れ
ゑかく打一ゟ是てもまる
つぱせきちく神氣れおゝく
にもせぬ何人るもひ押の
ゆうき寛り系甚てゝ重云琥毬花
さし此や鹿くをかさ死石卉
何ゞるとおうけるへり
帰りり一きは
雑ちりとこ亭や花の友　宗閑

風かをるこちらにや句のおもしろく一ぱい
芭蕉風やいきほひ勇めるかたちに雅言
夕立
よこしぶき　いかづち　いなびかり
ゆふだちハ太刀にいひかけ。
こゝぶれやきこえの元禄のこと。
きり相さるれやの夕り就て
とくもいひぬなるかゝ二寸れ
蓋に身れけもとらうらは。
ゆふだち諸乃そらに雅乃
氣又なにとをいひなし。
三とりぬ花も儀式の悪さう。
露ととりくる早れこと。

かいそりげなきこゝろしなや
よもたゞれて。露先生銭
ありよ夕りとも二百二志
まるを小雨ともいそう
夕だち風ふれやきえて寺る
行る人の間ハ青須庫の
作といそう
ゆふだちハてお西国乃あれみ
ゆふだち風ぬきて小ぶとあるし涼
せ銭をけてある夕だちやいかな時
夕立ハかぶらきかうに夜分に花
納涼
あさすゞみ　夕すゞみ

これづき乃涼ちをさけ。ながれ
有ところ南ちして。ぶか
偏くに何せ名へ。瀬中を渕(ふち)と
なる比わひ。石壁(せきへき)乃水など
さゝへ石菖(せきしやう)よ露をそゝぎ
あて。涼しさをまねくを
うしき。泉水(せんすゐ)ありおり
ひて。築山(つきやま)よ植物をとめ
て風をまねんぢへ。紙のまま
いひの冷合して暑さを
生まれ。さらしいこの蔭
服あり。炎天(えんてん)をしれく
何りさ海などすへし

やくわりをへがねぬ夜の何さや
何せ名へ物つきより。湯(ゆ)の涌や
瀧つぼ。水音さぬやゆすゞ 三伏

扇

かみおり 末広 舞扇 修羅扇
絵 涌 紅葉 扇ね撲
扇きり ひく 拍子 贄毅 沈親堂
こうちん 名ちうちん

團

あしうちえ
かうんぶにからして。は二月の
雲ふすゝへ。多ににおもし
ては修羅がとなる月に
おうんなど。すへて。あらく
まふんぶん。又むかのふかめん

えんどめしかゝりけりける
絵やられまなありけりあつくる。
扇うちハ乃作さあかくハ
似絵し
風をあ月でひそうにひらく扇かな
縁言あかせてあつくハあかうらく
月影をまたにもふきるや出ゝ扇
使ふるゝ扇や夜の一番子なり
骨ちりてもちおけハ何扇なり
ちけづちの言やあふれの地がなう正武
ことかつきさらん　夜んらん
猿
又ちらん　あうし出猿
こころときけ川　夢の勝　竹さ乃義系

御手洗
古ハ百安とごくた朱雀門
よ出るくらをせをの主じん
すとぶきし出すふるす
をミなつきねなどいぬう
待しと我いまのも清こ
をりれ日おやしのふきや
まそ紙やかをびを神ま
幸むけくごもちがをかご
さをやせこのんすまも。
まぐ乃れ扇の貧之神銭
をりひすそ何るされバ
いらひるすやえらし　合男

ゐあつしさも蔵だらけへ
ふどいり
一夜や子にされつまれ出家かな
世苑とあてだまりのはいりやみすきり門　西峯
何も知らず頭陀袋をやつし人　沢芦翁